

## 17. 夏季用掛けぶとんの衛生学的考察

名古屋市立女子短大 辻村 美津

○佐野 恂子

1. 近来夏季用掛けぶとんとして、種々、市販品が見られるが、高温高湿の日本の夏の夜具として、いずれが適しているかを検討するため、本研究を企てた。

2. (イ)試料 夏ぶとん(木綿わた入れ、合繊わた入れ)タオル、夏毛布(レーヨン製片面起毛のもの—A、両面起毛のもの—B)の5種。敷きぶとんは、木綿わた木綿側のものを使用。(ロ)方法 場所は学内のタタミ敷きの部屋。被検者は、20~25才の健康な男女各2名。皮膚温10ヵ所、寝床内温度5ヵ所は、銅コンスタンタン熱電対を使用、寝床内湿度4ヵ所は、ミニマ湿度計を使用。被検者は安静30分後仰臥し、測定はその直後及びその後20分毎に7回。気温気湿は、アウグストの乾湿球寒暖計で測定。

3. 平均皮膚温の時間経過による変化は、木綿わた、タオル、合繊わたは、40分まで漸次上昇し、その後は稍上下する。夏毛布Bは、最初の20分間にいちじるしく上昇しその後は下降して60分では急激に下降し、その後は

その状態が続く。夏毛布 A は他の 4 種より一般に皮膚温が低いが、変化は B と殆んど同様である。寢床内温度の時間的变化も皮膚温の場合と同様の傾向である。②皮膚温、寢床内温度の部位別変化の状態は、各試料とも略同様。③寢床内湿度の時間的变化は、タオルは比較的少なく、合繊及び夏毛布 B の後半における上昇が目立つ。④部位別には、各試料とも、季肋部の側面と肘との間隙部が高い。